

久米邦武編『米欧回覧実記』におけるヨーロッパ像

西川長夫

1 はじめに——テキストを読む

もう10数年も昔のことになりますが、私の勤務校である立命館大学で、20人ほどの仲間が集まって『米欧回覧実記』（岩波文庫、全5冊）の輪読会を続けたことがあります。そのメンバーは、日本史、中国史、アメリカ史、ドイツ史、フランス史、英米文学、フランス文学、ドイツ文学、美学、社会学、等々、相異なる多様な領域の研究者たちで、岩倉使節団にかんしても『米欧回覧実記』についてもほとんど専門的な予備知識をもたない、いわば素人集団でした。それでこの方面の先学である田中彰、高田誠二、芳賀徹の3先生にも立命館に来てお話しをしていただき、御指導をお願いしました。

私たちがこの書物の輪読会をはじめた動機はさまざまだったと思いますが、共通して言えることは、自分たちのそれぞれの研究を近代の歴史のなかにあらためて位置づけなおし、自分たちがすでに受けいれてしまっているアメリカやヨーロッパ、あるいは世界のイメージに再検討を加えるための1つのきっかけにしたい、というような気持があったと思います。毎回報告者を決めて、月1回くらいのペースで、それでも読みはじめると、3年くらいで読みおえました。その後、ただ読みするだけというのももったいない、ということで結局、全員が執筆して1冊の本を作りました。1995年に法律文化社から出た、西川長夫・松宮秀治編『「米欧回覧実記」を読む——1870年代の世界と日本』がそれです。第1冊はたいへん誤植が多く、読者に御迷惑をおかけするという結果になってしまいましたが、最近ようやく2刷が出て誤植を訂正することができました。もっとも今度は9500円という高い定価がついていて、まるで読者を遠ざけるような定価だと憤慨したのですが、これが学術書出版の現状なのかもしれません。

今日、私が報告を引きうけさせていただいたのは、そのときにみんなで考えたり書いたりしたことなかで、その後もずっと気になっていたことのいくつかを取りあげて、この機会に皆様の御批判や御意見をうかがい、自分の考えをさらに1歩かあるいはせめて半歩でも先に進めたいという、たいへん虫のよい考えからで、何か特別の大発見や新解釈があったわけではない、ということをはじめにお断りしておきたいと思います。

輪読を進めていくうちにまず私たちが気付いたことは、これはなかなかむずかしいテキストであるということでした。むずかしいというのにはいくつかの意味があります。第1に、ごく単純に言って、この漢文調の文章は、私たち戦後教育を受けた世代の者にとっては、すでに読めなく

なった古典的文章であって、朗読することも正確な意味をとることもむずかしい。

第2に、日本の近代の方向を決定づけたとされるこの文書は、どうしても日本のその後の歴史的發展と関連させて、きわめてイデオロギー的に読まれてしまう。例えば後の時代の富国強兵や脱亜入欧というイデオロギーを投映して、そう読みとってしまう（加藤周一の「日本の世界像」1961年はその極端な例ですが、それを引き継いだ田中彰氏の読みもその傾向が強い。戦後歴史学に共通した傾向だと思えます）。これに反して高度成長以後の日本人・日本文化論のコンテクストでは、日本人の優秀性や可能性の証として読まれる傾向が強い（芳賀徹氏や泉三郎氏の読みはその代表のように思われました）。

第3に、特に強調しておきたいのはテキストの構造的なむずかしさです。それは例えばこのテキストは使節団の公式報告書であるのか否か、あるいは公式報告書であるとしてもどのような種類の報告書であるのか、ここに記されているのは岩倉の意見なのか木戸の意見なのか、あるいは久米の意見なのか、等々の難問を呼び起こします。またこのテキストは、百科辞典的な総論の部分と日記体の部分、あるいは紀行文などを含み、またいわゆる報告書的な記述の後に1段段落を下げて筆者のコメントや意見が記されるなど、きわめて複雑な形式をとっている。それを全体としていかに解読するかというのは決して単純な問題ではなく、それなりの読み方が必要とされるはずです。

ここでテキストの問題をくわしく論じることはできないので、10年前に私たちがかなり漠然と考えていたことを、もう少し明確にアクセントをつけて言うと、次のようにまとめることができるのではないかと思います。——《富国強兵や脱亜入欧（戦後歴史学）でなく、日本人の優越性（日本人・日本文化論）でもなく、岩倉や木戸や大久保や久米でさえなく、公式報告書や日記や紀行文や百科全書でもなく、あるいはそれら全てを含む、1回かぎりの独自で幸運な構造をもつ歴史的な作品として読むこと。》

「岩倉や木戸や大久保でさえなく」というのは、1つにはかつて『米欧回覧実記』（以下『実記』と略す）は使節団の公式報告であり、あたかも岩倉が書いた（あるいは岩倉の意見が直接的に記されている）、といった誤解が存在したからですが、もう1つ重要なことは、岩倉使節団の団員は、それぞれ強烈な個性と独自の意見の持主であり、意見の対立はあっても、共通の意見や統一の見解は出されていないし、また出るはずもなかったということです。また「久米でさえなく」というのは、筆者は久米であり、『実記』は最終的には久米が1人で書いたことは分かっていますが、しかし久米が全く自由に自分の見解を書けたかという、やはり使節団の公式報告書という限界があり、書けないこと、あえて書かないこと、あるいは慎重な表現を必要とする部分が随所にあり、またそうした公的な立場を意識したがゆえに視野が広げられて遠くまで見通すことができた部分もある、ということです。

『実記』が現在私たちがその言葉で想像するような公式報告書でないことは、すでに述べたように使節団の統一の見解が出せるはずもなく、また確固として政府の基盤や政策も確立していない時期であったことを考えれば納得がいくと思えますが、さらに『実記』の内容から考えても使節団の最も重要な任務であった条約改正などにかんする各国政府との交渉、等については全く触れていない。つまり肝腎なことは記されていないことから分かります。『実記』は、岩倉がその刊行に寄せて記したように、まさしく「観光」（つまり文明の視察と探究）を主な目的

とした、そうした意味での公式報告書であると考えべきでしょう。

「1回かぎりの独自で幸運な構造をもつ歴史的な作品」という言い方は、私が1番強調したい点ですが、少し分かりにくいかもしれません。「歴史的で1回かぎり」というのは、例えばこのような使節団は5年前でも5年後でも不可能であったことを考えてみて下さい。使節団は、南北戦争後の統一と再建の時代に開通したばかりの大陸横断鉄道と、開通直後のスエズ運河を通過して世界一周をはたしたのです。ヨーロッパもまた普仏戦争とパリ・コミュンズの直後で、国民国家再編が行われている動乱の後の危うい平和の瞬間を縫うようにして、使節団は米欧における長期滞在と世界周航をはたすことができたのです。

国内的に見れば、留守政府による近代化政策は着々と進行してはいたが、日本の将来の方向を決めるような基本的な政策は未決定で、憲法の制定にもまだ10年を要するような時点でした。そのような時期だからこそ、『実記』には、共和主義に対する共感や、フランス革命を学ぶべき文明の源泉として記すことも可能であったのです。また久米邦武のような欧米の言語、つまり英語やフランス語もできない漢学者に、米欧回覧の記録を委ねるということも、この時期だからこそ可能であったので、その結果として、この『実記』のような独得の構成と文体をもつ作品（それ自体が東西文明の交流の場ともいべき作品）が生みだされたのです。歴史の奇跡としか言いようがない、とつい口走ってしまうような魅力がこの作品にはあります。

最後にもう1つだけ、『実記』の興味深い歴史的な性格を指摘しておきたいと思います。この時代には日本ではまだ国民国家の論理と言語は成立していません。それを求めて岩倉使節団が派遣されたのですから、それは当然のことです。『実記』には国民国家の論理と言語の形成過程がある程度読みとれます。言語にかんしては、例えば文明はほぼ定着しているが、文化は時に文華と記され漢語の古典的な意味との区別が明確ではありません。国民という語はくりかえし使われますが、当時の日本ではまだ人民の方が多く使われているはずで、これはまさに国民国家の視察の記録が国民という概念の形成を要求しているといった感があります。会社は使われるが社会はまだ使われていません。民族は2度出てきますが、多くは民種、族種、種族、人種、民俗などが使われ、民族概念の理解に苦労している様子がかがわれる。だが、この問題については後で、もう少しわしく述べてみたいと思います。

2 なぜ「ヨーロッパ像」か

私の報告のタイトルは『「米欧回覧実記」におけるヨーロッパ像』となっています。当然、なぜ「ヨーロッパ像」かという問いが出されるはずですが、テキスト内的理由とテキスト外的理由があります。はじめにテキスト外的な理由から言いますと、私は自分の研究分野がフランスを中心にしたヨーロッパをフィールドにしていることもあって、つねづね日本近代におけるヨーロッパ像の変遷に関心をもってきました。日本にとってヨーロッパとは何か。この点に関しては、今年の春に出た短い文章を資料に添えておいたので御参照下さい。¹⁾

日本とヨーロッパの遭遇については5つの段階が考えられます。第1は1543年のポルトガル人の種子島漂着とそれに続く交流。これはコロンブスの「新大陸発見」のほぼ半世紀後です。だが

この幸運な出会いはその後鎖国などがあって一時とだえます。したがって第2は開国から明治維新に至る時期で、『米欧回覧実記』はこの時期のヨーロッパとの遭遇の特色を伝える代表的な文書です。現在の私たちのヨーロッパ像はほぼこの時期に決定されたのではないかと思います。その後、第1次世界大戦ととりわけ第2次世界大戦は、私たちのヨーロッパ像の形成にとっても大きな事件でした。しかしながら明治維新以後、大学やその他の研究機関におけるヨーロッパ研究が進むにつれ、研究の分化と専門化の結果として、個別の知識は深まるがヨーロッパの全体像が描けないようになってきた。例えば陸軍はフランス、海軍はイギリス、教育はアメリカ、医学はドイツ、美術はイタリア、等々をモデルにするといった領域による分業があり、また同じ文学研究でも英文学とフランス文学、あるいはドイツ文学の研究者は、それぞれ使う用語も異なり、うまく話が通じないということが起こりがちでした。現在でも多分にそういうところがあります。

現在は第5段階と言ってよいと思います。欧州連合EUの時代になって、私たちは統合されたヨーロッパの全体像を描く必要に迫られています。いま『米欧回覧実記』を読みかえしてみると、ヨーロッパの多様性ととも、ヨーロッパがさまざまな交易や交通網によって、1つの地域として機能していることが強調されており、いわば「統合されたヨーロッパ」という認識（しかもそこに描かれたヨーロッパは、トルコやロシアを含むいわば「拡大されたヨーロッパ」です）がはっきりと示されていることに驚きを禁じえません。そしてそのことは逆に、近代の130年のあいだに、私たち日本人の世界認識においていかに大きな欠落があったかということを変えて感じさせます。

次にテキスト内的理由です。御承知のように岩倉使節団は1871年の12月23日に横浜を出港し、翌72年1月15日にサンフランシスコ着、その後ソルトレイクシティを経てワシントンに至り7月の26日までアメリカに滞在した後ロンドンに向います。イギリスの滞在も長く、ほぼ4ヶ月間、次のパリに着いたのは12月16日でした。フランス・パリの滞在は2ヶ月ほど、その後のヨーロッパ視察はそれぞれ短期滞在中、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア（ペテルスブルク）、デンマーク（コペンハーゲン）、スウェーデン（ストックホルム）、それから南ドイツ連邦（ハンブルク、ミュンヘン）を経て、イタリア、オーストリア、スイス、さらにフランスのリヨンを経て1873年7月18日マルセイユから乗船ということになります。（分かりやすいように日程表を添えておいたので御覧下さい²⁾。

『米欧回覧実記』は日録風にその視察日程を記しており、全5編のうち第1編は北^{アメリカ}亜米利加州合衆国ノ部（第1巻～第20巻）、第2編英吉利国ノ部（第21巻～第40巻）、第3編は欧羅巴大洲列国ノ部上（フランス（パリ）が第41巻～第48巻、ベルギーが第49巻～第51巻、オランダが第52巻～第54巻、プロイセン＝ベルリンが第55巻～第60巻）、第4編は欧羅巴大洲列国ノ部中（ロシア＝ペテルスブルクが第61巻～第65巻、北日^{セルマン}耳曼前記が第66巻、^{デンマーク}連馬国の記が第67巻、^{スウェーデン}瑞典国ノ記上・下が第66、69巻、北日耳曼後記上・下が第70・71巻、南日耳ノ記が第72巻、イタリアが第73巻～第78巻、^{オーストリア}奥地利国が第79巻～81巻）、第5編は欧羅巴大洲列国ノ部下（万国博覧会見聞ノ記上・下が第82、83巻、スイスが第84巻～第86巻、フランス・リヨンとマルセイユが第87巻、スペイン及びポルトガル国の略説が第88巻、欧羅巴洲総説が第89巻～第93巻、帰航日程が第94巻～第100巻）、といった構成になっています。つまり、全5編のうちアメリカ合衆国とイギリスがそれぞれ1編を成すというのは『実記』の1つの特色であって、明治新政府における両国の重要性を物語るものではあるが、しかしヨーロッパを全体として見れば全編のほぼ5分の3を占めており、またとりわけヨーロッパにかんしては各国の総説の他に、

「欧羅巴洲総論」全5巻が付されており、ヨーロッパを全体として見る観点がそこで明らかに認められます。

「欧羅巴洲総論」をもう少し詳しく見てゆくと、第89巻は「欧羅巴洲政俗総論」と題されています。ここで言う「政俗」とは政治の「政」と風俗の「俗」ですが、このおそらく明治初期にはよく使われてやがて消えてしまう「政俗」という言葉は、ちょっと面白い言葉だと思います。ここでなぜ「政俗」という言葉が用いられているかという点、1つにはそれが政治を決定するという考え方があるからですね。各国の多様な政治の根底にあるものに注目しよう、それを理解することによって諸国間の「交際貿易」が可能になる、という提言です。さらにそうした考えの背後には政治は人民の風俗習慣を映しており、またそうあることが望ましいという久米の身につけた中国風の政治倫理（一種の東洋的デモクラシー）があったようです。そうした考え方を前提にして、「此ニ欧洲各国ノ政俗ヲ略論セン」としてこの巻にはまず冒頭に諸国の一覧表が記されている。これは『実記』のヨーロッパ認識を知る上で実に興味深いので、少し長いのですがその全体を見ていただきたいと思います。

○欧洲列国中ニ已ニ日本ト交際貿易ヲ締約セルハ、十四箇国アリ、未タ之ヲ締約セサルハ、只二国アリ、土耳其、希臘ニナリ、合セテ十六箇国ニテ、全欧羅巴ノ洲土ヲ分占シタリ、此数国ヲ詳カニ分別スレハ、更ニ数十ニ分カル、之ヲ類別スレハ、九類ニ合ス、其政俗ヲ論スルニハ、其大別小別ヲ知ラサルベカラス、

露西亞 六箇ノ邦国ヲ合セテナル、

露西亞 ^{ポーランド}波蘭 ^{フィンラン}芬蘭 ^{カサン}加堡 ^{アスダラカン}阿斯達拉罕 ^{コーカシユス}高加索

^{デンマルク}噶馬 同族三種ニ分レ、各一国ヲナス、

^{スウェーデン}瑞典（芬蘭ハ此国ノ分レテ露ニ人タルナリ）^{ノルウェー}那威 噶馬

独逸 三種ノ聯邦ニ分ル、

北方独逸ハ ^{プロイス}普魯士 ^{サクセン}薩撒 ^{メクレンボルク}梅格稜堡等ナリ

南方独逸ハ ^{バヴァリア}巴威里 ^{ウルテンボルク}瓦敦堡 ^{バーデン}巴丁等ナリ

奥国独逸ハ ^{ボヘミア}奥地利 ^{ボヘミア}波希米 ^{モラヒヤ}モラヒヤ等ナリ

^{ハンガリー}匈加利（此ハ匈奴ノ移民ニテ別ニ一国ヲナス、土耳其ニ近シ、今ハ奥ニ聯合シタリ）

土耳其 数国ノ上ニ帝タリ、

土耳其 ^{ローマニヤ}羅馬尼 ^{セルヴィヤ}塞爾維 ^{イチーブト}埃及（此ハ亞弗利加ニカ、ル）^{ギリキ}希臘（独立ヲナス）

以太利 当今始メテ統一シタレトモ、^{なお}猶聯邦ノ余習ヲ存ス、

^{サルヂニヤ}サルヂニヤ ^{ナポブル}那不兒 ^{羅馬}羅馬 ^{ロンバルチー}ロンバルチー ^{ヴェニス}威尼斯

瑞士 仏、以、独ノ三部ニ分ル、

仏国 一千七百年末ヨリ、全ク一統ニ帰セリ、

英国 四箇国ノ聯邦ナリ、

^{イングランド}英倫 ^{ウェールズ}威爾斯 ^{スコットランド}蘇格蘭 ^{アイランド}愛蘭

蘭国 二箇国ニ分ル

^{白耳義}白耳義 ^{荷蘭}荷蘭

^{スペイン}西班牙 四箇国ナリシニ、四百年來ハ、二箇国ニ合ス、

^{ポルトガル}西班牙 ^{ポルトガル}葡萄牙

(V-146~148)

一見して明らかなように、「一千七百年末ヨリ、全ク一統ニ帰セリ」と記されたフランスを除けば、ヨーロッパの諸国はいまだ国民的統一が完成しておらず、複雑な人種=民族的な構成を露

呈しており、政治を論じることは、各国のそうした複雑な差異を照しだすことでした。久米がこのあと直ちに人種問題と民族自決の問題（「民種の権」）の記述に入るのは当然の成り行きであったと思います。国民国家の再編と国民統合が一定の段階に達してからは覆い隠されてしまった民族問題の複雑な状況を、130年前の旅行者はまだ見ることができたのです。

「欧羅巴洲総論」の第90巻は、「地理及ヒ運漕」、第91巻は「気候及ヒ農業」、第92巻は「工業」、第93巻は「商業」を扱っており、そこで特に強調されているのは、交通と交易であり、農業、工業、商業のなかでは、商業が最も重要視されている。そのことは第93巻の冒頭に記された次の文章でも明らかでしょう。

○欧洲ノ土地ハ十分ナル農野ニアラス、其人民モ亦機敏ノ工ニアラサルナリ、欧洲人ハ、日本人ニ接スル毎ニ、其伶俐ヲ称シ、機敏ニ驚カサルナシ、日本人ハ拙悪ノ器械ニテ、欧洲ノ工産ヲ学フ、欧人ハ之ヲ見テ、模擬ノ精神非常ナルヲ嘆称セシコトハ数キケリ、故ニ一人上ニテ論スレハ、欧人ハ、日本人ニ及ハサルコト遠シ、然ルニ能工芸ノ淵藪トナリ、富殖ノ実益ヲ得シハ何ソヤ、彼ハ其資性ノ機巧ニ於テ、待ム所ニアラサルコト、猶其地カノ瘠悪ニテ待ムニ足ラサルト同シ、故ニ能講究シ、能刻苦シ、能協和シ、人事ヲ尽シ、天ニ勝ツノ道ヲ求ム、是ニ於テ講究力ハ學術ノ進歩トナリ、刻苦力ハ器械ノ發明トナリ、協和力ハ貿易ノ隆昌トナリ、之ヲ積テ今日ノ文華ヲ致セルナリ、欧洲ノ實際ヲ熟覽スルニ、東洋ノ人ハ其天ヲ待ム、農工ノ業ハ、之ヲ「プラチカル」ニ得タルナリ、西洋ノ人ハ、其人ヲ尽ス、農工ノ業ハ「タオリック」ヲ頼ミ、其術技ハ器械ニ待ムヲ免レス、是其工事も亦深く畏ルニ足ラス、只其最モ畏ルヘキハ、其協同力ヨリ生シテ、貿易上ニ注意ノ縝密ナル、能國産ヲシテ、十分ノ価ヲ失ハシメサルニアリ、夫商業ハ猶軍旅ノ如シ、天モ待ムニ足ラス、惟人和ヲ是主トス、欧洲ノ最モ世ニ模範トナルハ、商業ヨリ最モナルハナシ、
(V-220)

「欧羅巴洲総論」の全5巻は、単にヨーロッパ州のまとめではなく、アメリカとイギリスの長い滞在とヨーロッパにおける長い旅程の末に導きだされた、あるべき近代に対する一つの結論としての意味をもっていると思います。「欧羅巴洲総論」では、視察の目的からすれば最も重要であったはずの、法的制度、政府や議会、あるいは軍隊や警察といった統治機構にかんする記述が欠けており、そのかわりに政俗が記述され、交通と産業、なかでも商業において発揮されるような人々の「協和力」と「貿易ノ隆昌」に対する関心が強く表明されている。これは日本の近代の失われたもう1つの可能性を考える上でも興味深いことだと思います。

3 『米欧回覧実記』におけるヨーロッパ像の特色

(1) 文明の中核

イギリスから舞台を大陸に移した『米欧回覧実記』の第3編以下には、英仏の比較が度々論じられています。イギリスはすでに産業革命をやり終えており、海外に広大な植民地を有し、武力と経済力においても突出した世界の覇権国でした。大英帝国と覇権を争って破れたフランスは、さらに普仏戦争にも破れ、経済的にもイギリスやベルギーにも遅れをとる、いわば斜陽の国家であったはずですが、『実記』では英仏比較論はほとんどの場合、フランスに軍配が上っている

る。これは実に興味深い。おそらくそこには、岩倉使節団というよりは久米邦武個人の独自の文明観が示されているはずだ。

久米はイギリス論、つまり第2編を次のような記述で終えているのですが、そこにはすでにイギリスに対する讃嘆と同時にある種の異和感が感じられます。

○全国一歳ニ海関ヨリ輸入税ヲ納ムルコト一億弗、此内倫敦港ノ運上所ニ於テ抽税スルモノ、其半高ニスク、倫敦ノ繁昌シ、貿易ノ隆盛ナルコトヲ知ルヘシ、其他里味陂^{リヴァプール}ニテ一千五百万弗ヲ抽テ、蘇格蘭ニテ千二百五十万弗ヲ抽テ、愛蘭ニテ一千万弗ヲ抽ツ、是里味陂、哥羅斯哥、及ヒ都伯林^{トッブリン}ノ繁昌、通ニ差アル証ニテ、此ヲ除外ハ、英倫ノ各港中、「プリッストル」一港ニ、五百万弗ヲ抽ツ、其他ノ諸港ハ、合セテ八百万弗ヲ抽ツルノミ、是ニテ全英国海口ノ景況ヲ察スヘシ、夫レ製作貿易ハ、全英国ノ富ヲ謀ル要領ニテ、即チ国民ノ注意、重ニ此ニアルナリ、故ニ人民ハ各地ノ都邑ニ集リテ、村落ニ住スルモノ自ラ減少シ、農作食用元品ノ産、益^{ますます}欠乏スルヲ免レズ、是ハ其製作貿易ノ余利ヲ以テ、外国ヨリ買入ル、之ヲ目シテ營業力ヲ買フト謂フ、營業力ノ益盛ナルニ従ヒ、元品ノ需用益多ク、従テ人民一般日需ノ度モ、自然ニ超上シ、年年ノ消費高ヲマシ、故ニ英国ノ傭工ハ、大抵肉ト麩包トヲ食料トス、仏國ノ傭工、三分ノ二ハ馬鈴薯ト玉蜀黍トニ生活ス、兩國ノ傭給従テ懸殊ス、世界ニ傭給ノ貴キハ、米英ノ兩國ニスルモノハアラス、此等ノ事情、尽ク我日本ト反対ス、此國ノ幅員、人口、位地ノ、我日本ニ似タリトテ、其營生図利ノ目的ヲ学ハント欲スルモ、未タ得ヘカラス、故ニ英国ニ觀察シテ、感觸ヲ我ニ与フル所、亦甚タ親切ナラス、只倫敦ハ世界天産物ノ大市場ナルヲ以テ、農利天産ニ富ム國ニ於テハ、其貿易ノ景況ニ深ク注意スヘキハ、方今緊要ノ一ナルヘシ、内部ノ政治、国民ノ景況ニ於テハ、未タ我ニ緊要ナル所ヲミス、仏國ハ、農利ヲ務メテ製作ニ及ホシ、并セテ貿易ニ巧ミニ、海外ニ及フ、最モ周備セル文明國ナリト稱ス、此ヨリハ其觀察ニカ、ラントス、

(II-384~385)

イギリス編を上のようなフランスに対する期待の言葉で終えた久米は、それに続く第3編の冒頭、第41巻「仏朗西国総説」の文章を次のような言葉で始めています。

仏朗西國ハ、歐羅巴洲ノ最モ開ケタル部分ニ於テ、中央ノ位置ヲシメ、百貨輻輳^{ひやくふくそう}ノ都、文明煥發ノ枢ナリ、(…)

(III-21)

そして次の頁には、パリを文明の中核とみなす文章が続きます。

歐洲各國、及ヒ歐洲人種ノ住スル國々ハ、ミナ此都ヲ文明都雅ノ尖点トナシ、遠近ニ尊敬セラレ、英人ノ高慢ナルモ、婦人ノ風俗ハ、巴黎ノ新様ヲ模倣シ、露國ノ強大ナルモ、私人ヲミレハ都人士トナシ、巴黎ノ麗都ハ、天宮月榭ノ想ヒヲナス、抑^{おさ} 仏國ノ歐洲ニ尊敬セラレ、巴黎ハ文明ノ中核トナリ、流行ノ利權ヲトルハ、其由来久シキコトニテ、已ニ「チャーレマン」大帝カ、三孫ヲ仏、澳、以ノ三國ニ分封シタル後ヨリ、歐洲中原ノ王公貴族ハ、其管下ヨリ出タレハ、仏語ノ歐洲ニ勢カアル基本トハナリタリ、(…)

(III-22)

文明を都雅や流行と結びつけるところには、すでにある種の文明観の表明があると考えてよいでしょう。英仏比較論にもどって言えば、久米は、大工業やその製作品である鉄製品、大砲や車輛や船舶や機械などと文明を結びつけるのではなく、繊細な美術工芸品や優雅な風俗などに文明

を読みとっている。同じ製鉄所を訪れるにしても、久米の見るところは少し違っているようです。

○帰路ニ、「レテポットチャーモン」街ナル、「ワリコレー」氏ノ製鉄所ニ至ル、此場ハ、屋根ノ幹、屋柱、門扇、窓欄等、総テ屋造ニ用ヒル鉄材ヲ製スル所ナリ、仏国ノ屋造ニ用ヒタル鉄材ハ、其細工甚タ精幹ニシテ、軽靡ナリ、雕鏤藻績、風流ヲ極ム、英国ノ及ハサル所ナリ、(…)

(Ⅲ-88)

○此場ハ、仏国ニ於テ最大ナル製鉄場ノ一ニテ、近年埃及国ヨリ、四万八千磅ノ価ニテ、其国王ノ花苑ニ用ヒル、四百五十尺ノ屋根ヲ頼マレテ、成就セリトテ、其門上ノ飾リ、柱ノ彫刻等、ミナ其副ヲ作りテ、留メタルヲ示シヌ、頗ル手入ノ細工ナリ、

英国ノ工芸ハ、龐大ノ物ヲ製シテ、世ノ需用ニ供スルヲ目的トナス、而テ其巧技ヲ進メテ、華麗繊細ノ工ニイタレリ、商法ノ目的モ亦然リ、多ク食用日需ノ品ヲ貿易シテ、製造ノ細品ニ及フ、仏国ノ工芸ハ、全ク之ニ反シ、華麗繊細ナル手技ニ於テ独歩ナリ、而テ建築、造船、銃砲、紡織ミナ能セサルナシ、其商法モ、製作品ヲ以テ主眼トナシ、兼テ海商ヲ競フテ、元品、食用品ヲ貿易ス、是両国ノ相對シテ、富庶ヲ競フ概形ナリ、巴黎ノ各場ヲ回覧シ、其英国ノ如キ、巨大ノ製作場ナキヲ以テ、仏国ノ生理ハ、英国ニ及ハサル遠シトナスハ、甚タ誤ル、

(Ⅲ-89)

久米の文明観は、彼が文明を感じとる場所によく表われています。久米が文明を感じる場所は、書庫や博物館などが多い。次の文章はパリの国立図書館を訪れたときのものです。

西洋ノ書庫、博物館ヲミル毎ニ、其用意ノ厚キ、我東方ノ遠国ノ物モ、重貨ヲ惜マス、勞苦ヲ厭ハス、収拾採録セリ、以テ我邦人ニ示スニ、往往ニ驚異自ラ知ラス、却テ其解説ヲ聞テ、我内地ノコトヲ詳悉シ帰ルニ至ル、西洋ノ能ク日新シ、能ク進歩スル、其根元ハ愛古ノ情ニヨレリ、試ミニ見ヨ、凱旋門ノ壮大ハ、羅馬ノ古城門ニ脱化シ、「セイン」河橋ハ「タイハル」橋ニ脱化セリ、千百年ノ智識、之ヲ積メハ文明ノ光ヲ生ス、之ヲ散スルトキハ、終古葛天氏ノ民ナリ、

(Ⅲ-71~72)

「愛古」というのは久米が文明を論じるときの基本的な態度です。だがそのことは彼が伝統主義者であるとか、復古主義者であることを意味しない。次の、「万国博覧会見聞ノ記上」の冒頭の文章を読んで下さい。

欧羅巴洲ノ列国、仏朗西革命ノ機ニ感触セラレ、民ハ自由ノ理ヲ展ヘ、国ハ立憲ノ体ニ変シテヨリ、爾来星霜僅ニ二十年ヲ経タリ、中ニモ奥国ハ、帝威ヲ保統シタレトモ、亦二十年来、已ニ立憲ノ体ニ改メ、露国ノ独裁モ、十年来ハ、ホゞ民ニ自由ヲ与ヘンコトヲ図ル、欧洲ノ文明ハ、此改革ノ深淺ニ源シ、其精華ハ、発シテ工芸ノ産物トナリ、利源ハ滾々トシテ湧出ス、

(Ⅴ-21)

上の文章は久米の文明概念の思いがけない側面を示しています。フランス革命が文明の契機として肯定的にとらえられているのですから。してみるとパリが文明の中枢でありえたもう1つの理由は、それがフランス革命の発祥の地であったからです。ウィーン万国博覧会の見聞を記すために、久米がなぜフランス革命から論じはじめたかという点、久米はこの万国博覧会に、近代の文明化の世界地図を読みとろうとしていたからです。上の文章に続く後半部分をご覧ください。

米、英、仏ヨリ、欧洲ノ野ヲ経歴スルニ、通邑大都ニ、製作ヲ競ヒ、貿易ヲ務メルコト、昼ハ車輪ノ鞣鞣

タルヲキ、夜ハ^{えんえん}炎燄ノ天ヲ焦スヲミル、各都ニ留レハ、製場商会ノ厚意ニテ、ミナ其製作ノ状ヲ実験セシメタレトモ、是ハ特ニ千百中ノ一ニシテ、其国ニ於テ、尤大盛隆ナルモノノミ、^{いづくん}安ソ全洲製作ノ景況ヲ尽スニ足ラン、幸ニ^{うんこく}埃国ニ万国博覧会ヲ開クニ逢ヒ、其場ニ観テ、昨日ノ目撃ヲ再檢シ、未見ノ諸工産ヲ実閲シタルハ、此記行ヲ結フニ、大ニカヲ得タリ、夫^{それ}歐洲列国ノ大小相分ル、英、仏、露、普、埃ノ大国アレハ、又白、蘭、薩、瑞、暹ノ小国アリ、^{うんこく}國民自主ノ生理ニ於テハ、大モ畏ルニ足ラス、小モ侮ルベカラス、英、仏兩國ノ如キハ、ミナ文明ノ旺スル所ニテ、工商兼秀レトモ、^{ベルギー}白耳義、^{スイス}瑞士ノ出品ヲミレハ、民ノ自主ヲ遂ケ、各良宝ヲ^{うんこく}蘊蓄スルコト、大国モ感動セラル、普ハ大ニ薩ハ小ナルモ、工芸ニ於テハ相讓ラス、而シテ露国ノ大ナルモ、此等ノ国トハ、猶其列ヲ同クスル能ハス、埃国ノ列品ヲミレハ、勉強シテ文明国ニ列スルヲ得ルニスギス、^{なほ}是他ナシ、民ニ自主ノ精神^あ乏キニヨルナリ、噫此等ノ競ヒハ、是太平ノ戦争ニテ、開明ノ世ニ、最モ要務ノ事ナレハ、深ク注意スヘキモノナリ、

(V-21~22)

「太平の戦争」というのはおそらく久米が好んだ表現で、他にも何箇所か出てきます（例えばII-282, V-221）。この表現には、自由主義的な経済活動は形を変えた一種の戦争である、というきわめてリアルな認識と同時に、武力による戦争を野蛮な行為として退ける、久米一流の平和主義が秘められていると思います。ドイツ編における、マキヤベリのレアルポリティクスを説くビスマルクの演説（III-339）やモルトケの常軍備増強を求める議会演説（III-340~342）の引用を根拠に、『実記』における富国強兵のイデオロギーを強調する人がいまでもいるようですが、そうした演説の取り扱い方（これらの演説は特に賛否のコメントも付さず、どちらかと言えば義務的に素気なく引用されています）や、テキストのその他の部分に記されている軍備にたいする考え方（例えばイギリスの常備軍にたいする論及 III-96~）などを注意深く読めば、大国主義的な富国強兵に対する久米の異和感を感じとることができるはずです。

久米はフランスを中心にヨーロッパの近代を記述する。それは17世紀のルイ14世時代の栄光の後にフランス革命が起こり、さらに1848年の革命によって、ヨーロッパが近代国家の時代に入ったという認識があったからです。第41巻「仏朗西国総説」における以下の文章をお読み下さい。文明化の過程を、革命を経て封建から近代的な民主へととらえ、さらに48年をヨーロッパの近代国家への展開へ結びつける考え方を、久米はどこから学んだのか、知りたいところです。天皇制が確立する明治の20年代以降になれば、このような文章は書けなかったでしょう。

仏国ハ、独逸ト元来異族ナレトモ、紀元四百八十六年「クロヴィース」王、^{ライン}来因河畔ヨリ、^{ゴット}峨特人ヲ驅逐シ、^{へいかん}仏国ヲ始メシヨリ、^{きんりつ}仏独以ノ三国互ニ関係ヲ有シ、「^{ローマ}ベヒン」王ノ纂立ヨリ、深ク羅馬法皇ニ悦ハレ、^{ちようごう}其屏翰トナリ^{けんかく}寵遇セラレ、^{けんかく}威權歐洲ニ煇赫タリ、当時各国ミナ封建ノ制ヲ相襲ヒ、国内ノ大小名土地ヲ分領シ、并セテ僧侶勢ヲ^{はしりま}擢ニシ、^{こもこ}交モ下民ヲ^{しんぎよ}侵漁シ^{ほうこく}培克スルコト一千余年、^{しんぎよ}仏国ハ三十二邦ニ分レ、今ヨリ二百三十年以前、宰相「リセリユー」ノ治ヨリ、^{ルイ}路易十四世ノ威權マテハ、^{しんぎよ}王權隆盛ノ極点ニ上レリ、文明日ニ開ケ、^{せま}下民其压制ニタユル能ハス、一千七百八十九年ニ至リ、過激ナル民党蜂起シ、^{ルイ}國王路易十六世ニ逼リ、^{せま}立憲政体ヲ定メ、^{オボレオン}封建ノ制ヲ敗リ、^{オボレオン}貴族ヲ廢シ、^{オボレオン}寺領ヲ没入シ、同九十三年路易十六世ヲ死刑ニ行ヒ、^{オボレオン}全国瓦解トナレリ、^{オボレオン}拿破侖「ボナバルテ」ナルモノ、^{オボレオン}匹夫ニ起リ、^{オボレオン}此勢ニ乗シ、^{オボレオン}民政府ヲ籠絡シ、^{オボレオン}民權論ノ^{ドイツ}独逸各国ニ波及セルヲ幸ヒニ、^{オボレオン}兵威ヲ以テ封建ノ各国ヲ^{さいは}摧破シ、^{オボレオン}漸ク人望ヲ収メ、^{オボレオン}一千八百〇四年、^{オボレオン}仏帝ノ位ニ上リ、^{オボレオン}一時ノ勢焰ハ、^{オボレオン}殆ト歐洲ヲ并含セントセリ、^{オボレオン}是ニテ歐洲各国、^{オボレオン}封建ノ制、^{オボレオン}次第ニ破壊トナリタリ、^{オボレオン}是ヲ^{オボレオン}仏朗西革命ノ乱トイフ、^{オボレオン}日耳曼ノ聯邦、^{オボレオン}漸ニ立憲政治ニ変ス、^{オボレオン}一千八百十五年拿破侖ノ敗レシヨリ、^{オボレオン}三十三ケ年間ハ、^{オボレオン}又王国ノ治ヲナセシニ、^{オボレオン}一千八百四十八年、^{オボレオン}再ヒ民權ノ騷

乱起り、其波動ハ隣邦ニ及ヒ、以太利聯邦モ、終ニ一千八百六十年ニ、一統ニ帰シ、奥国ノ封建殘夢ヲツ、キシモ、一千八百六十七年ノ改革ニテ、全ク立憲ノ体ニツキ、今日ノ歐洲ヲナスニ至リシハ、皆仏国美ニ其運ヲ開キタルモノナリ、是ヲ再度仏朗西革命ノ乱トイフ、
(Ⅲ-22~23)

フランス革命と文明を結びつける論理は、『実記』におけるナポレオン3世の高い評価を説明するものでもあると思います。ナポレオン3世は、普仏戦争の際スタンで捕われ、イギリスで余世を送っていたのですが、岩倉使節団がパリに滞在している間に、訃報が入り、1873年1月9日の項には「此日第三世路易拿破倫、石癩ノ病ニテ英国ニ於テ殂セリ」という1行のみが記されているのが印象的です。フランスを敗戦に導いた人物ですから当時の評価は厳しいはずですが、『実記』ではナポレオン1世と並んで為政者のなかでおそらく最も高い評価が与えられています。

(…)
当時拿破倫第一世、多士ヲ集メ、民法ヲ修定シテ、人民ノ財産ヲ保護シ、權利ヲ全クセシムルコトヲ謀レルハ、各国ミナ称美シ、模範トスル所ナリ、爾後モ氣運人事ノ移変ニヨリ、益之ヲ修美ニシ、殊ニ拿破倫第三世ノ代ニ至リ、潤色セル所多ク、全国ノ富庶ハ、歐洲第一タリ、○仏国ハ、三民ノ生業普ク立ち、土地モ亦腴壤ニ属スレハ、人民ノ各地方ニ散処スルコト、大抵平等ニテ、其財産モ、亦之ニ準シ平等ナリ、全国ノ戸数九百万アリ、其百万ハミナ富有ノ家ナリ、其余八百万ノ内、商工ハ三百万ニテ、各都府ニ住ス、都府モ各地ニ散布ジ、大都会ノ人口十万以上ニ上ルハ、僅ニ六七ヶ所アルニスキス、家屋六百万余アリ、多クハ土地ヲ所持シ、自主ノ権アルモノナリ、近年村邑ノ人口ハ、較減シ、都会ニ較増セトモ、英国ノ情態トハ各別ナリ、英国ノ民ハ都府ニ聚リ、全民ノ十分八ニオシ、国利工商ニアリ、仏国ノ都府ハ、全民ノ十分四ニスキス、国利三業ヲ兼タリ、都府ノ著大ナルモノハ、巴黎ノ外、里昂、馬耳塞、及ヒ「ボルドウ」ノ三府ナリ、
(Ⅲ-24~25)

「全国ノ富庶ハ歐洲第一タリ」—これがフランス評価の第1点です。つまり、ここでも英仏の比較ですが、政府や国家の富は英国の方がはるかに大きいですが、英国は人口も富も一部に集中している、これに対してフランスでは国家の富は少ないが各地の住民がみな豊かで自立した生活をしている。その点を久米は高く評価します。そしてそのような国民と国家をもたらししたのは革命であり、革命の理念を実現したナポレオン1世と3世の政策であった。ナポレオンの政策のなかで『実記』が特に注目しているのは、貧民救助の法や公益質屋、労働者住宅のようないわゆる社会政策、つまりナポレオン3世の社会主義的側面ですが、これは近代日本の歴史学ではほとんど無視された部分であるだけに、久米がこの側面をくりかえし強調しているのは興味深い。次の文章はナポレオン3世に対する最大の讃辞ではないでしょうか。

拿破倫第三世カ、仏国ノ大統領ニ推挙サレシヨリ、遂ニ帝位ニ登リ、「セダン」ノ戦ニ敗レテ、普国ノ軍ニ降リシマテ、二十ヶ年ノ間ハ、正ニ歐洲ノ開化驟進ノ際ニテ、仏国ノ富強ヲ全クシ、益歐洲ニ輝キシ功業ハ、其治績ノ最モ著目スヘキ所タリ、殊ニ傭工細民ノタメニ、勸奨救助ノ良法ヲ与ヘタル功德ハ、反テ拿破倫第一世ノ上ニ出ルト、世ニ賞譽セラル、廢位ノ後モ、中等以下ノ民ハ、景慕シテ已マズ、今日覽観シタル、「ピットショーモン」苑ハ、其美挙中ノ一ナリ、此苑ニ遊ビ、假山ノ上ヨリ回瞰スレハ、巴黎東南部ノ市街ハ、屋瓦鱗ヲ敷テ、烟突ハ森森トシテ、黒烟ヲ吹き、清空ニ雨ナラサルノ陰ヲ催シ、夕陽ノ緒瓦壁ヲ映射スルハ、晚霞モ為メニ黄ナリ、此ハ巴黎製作場ノ集ル所ニテ、此苑ニ盤遊スル住民ハ、平常其中ニ止息シ、劳作ヲナス職工ナリ、馬鈴薯、玉蜀黍ヲ食ヒ、垢衣弊履ヲ穿チ、烟煤ノ中ニ奔走シテ、

場主ヨリ傭給ヲ受ケテ、生計トナスモノナリ、日曜日ニ至ル毎ニ、彼「バーテプロン」苑ニハ、華麗ノ馬車、輪輪相銜ムトキ、此苑ニハ夫婦相携ヘ、爺嬢相伴ヒ、歩シテ逍遙ス、両苑ノ景象同シカラサレトモ、其繁華ヲナシ、快爽ヲ受ルハ、一ナリ、

(Ⅲ-84)

久米はこの後、48年の「労働権利の説」やナポレオン3世の「職工市街の法」の説明にかなりのページをさいています。久米はナポレオン3世の社会政策のなかに近代文明の精髓を見た、と言えはささか誇張になりますが、しかし久米のナポレオン3世に対する共感にはそう言いたくなるようなものがあります。この共感は何に由来するのか。おそらく、中国の古典に培われた久米の「徳の政治」の理念が、ナポレオン3世の社会主義的パターンリズムにうまく呼応している、といったところはあると思います。

以上見てきたように、久米はフランス革命以後の近代国家のなかに文明の具現化の過程を見出す方向をとってゆく。これは岩倉使節団の目的から考えても当然の成り行きですが、しかし革命や社会政策など、使節団の当初の目標からは少し逸脱しはじめているような気がします。久米がフランス革命と文明の結びつきを強調するについては、西欧の文明といってもたかだか80年ほどのものであり、しかもそれが形をなしているのはヨーロッパのごく一部であって、日本がこの歩みに加わって進むのは決して不可能ではない、という現実認識にもとづいた激励のメッセージがこめられていたこともたしかです。また文明概念にかんしては、久米には近代の文明とは別に、もっと長期的な文明概念があったことも忘れてはならない。ヨーロッパ各地を巡った旅の終りにローマを訪れた久米邦武は、文明の栄枯盛衰について次のような感想を記しています。

(…) 其後歐洲ハ、峨特族ノ乱ル所トナリノ文明一タヒ塞リ、慘澹タル穢惡ノ域トナルコト、五六百年ヲ経テ、再ヒ回復シ、今日ニ至リテ、我輩ハ英京仏都ヲ歴テ、此羅馬ノ都ニ来レハ、塵埃飛味シテ、市塵ニ貧兒多ク、恰モ昔時ノ荆榛ハ、今日ノ文物ニ変化シ、昔時ノ昌運ハ、移テ今日ノ衰頹ニ変化シタリ、憶フニ歐洲文物ノ元氣ハ、自ラ定度アリ、一方盛ナレハ、一方衰フル歟、今英、仏、獨逸ノ盛ナルモ、其開化ノ由来セル素質ハ、自ラ羅馬ニ淵源シ、今ニ至リテモ、此都ニ觀レハ、歴歴徴スヘキモノ多シ、歐洲ノ文明ヲ談スルモノハ、必ス一タヒ此ニ来リテ、其史伝ヲ考徴スルト云、嗚呼、國ノ文明、其積成ハ一朝一夕ノコトニアラス、之ヲ数千年来ニ孕ミテ、然後ニ煥發スル如此シ、之ヲ考量スレハ、更ニ感スル所アリ、東西洋ノ相隔タル、古ヨリ風馬牛モ相及ハス、人心風俗ノ異ナル、毎ニ相反スルハ、其来源ノ殊異ナルニヨル、今我輩ノ西欧ヲ回歴スル、四海兄弟ノ思ヒヲナセトモ、試ミニ四百年前ノコトヲ回思スレハ、歐洲滿地嘗テ印度ノ東ニ、更ニ国土アラントハ、夢想ニタモ知ラザリシ、西洋ノ史ニ於テ、東西洋ノ相通セシコトハ、一千五百年ノ初メ、閣龍「パスコーデーカマ」以後ノコトナリトイフ、然ルニ反テ支那ノ古書ヲ稽フレハ、羅馬ノ時ニ、声息ノ相通セルコトヲ、歴歴トシテ徴スベシ、羅馬ノ始メテ盛ナルハ、西漢ノ時代ニアタル、漢武帝ノ西域ニ通スルヤ、弑師將軍ヲシテ、大宛ヲ伐テ、其名馬ヲトラシム、大宛ハ今ノ亞刺伯地方ナリ、是ヨリ亞刺伯ノ隊商ハ、陸路ヲ度リテ、西蜀ニ貿易ナシタレハ、東西洋ノ声息ハ、此時ヨリ已ニ通シヌ、後漢書ニ大秦國ヲ記スル頗ル詳カナリ、其伝ニ曰ク、其王常欲通使于漢、而安息欲以漢繒帛、与之交市、故遮闕不得自達ト、大秦ハ即チ羅馬ナリ、然則「オーゴスト」「カラカラ」帝ノトキハ、歐洲ニモ已ニ東方ニ漢土アルコトハ知レタルナリ、後漢桓帝延熹九年、大秦王安敦遣使、自日南徼外、獻象牙犀角瑇瑁、始乃一通焉、是紀元百六十六年ノコトニテ、羅馬帝安敦以那ノ即位後六年ニアタル、安敦ハ即安敦以那ナリ、東西ノ史正ニ相符合スレハ、此時已ニ羅馬ノ商舶ハ、広東ニ至ルコトアリキ、

(…)

(Ⅳ-287~289)

古代ローマの壮大なる遺跡とその前に存在する現在の貧困の対照から始まる久米のヨーロッパ文明論は、こうして古代ローマの商船が広東に出現していたことを古い中国の文書によって確認し、東西文明の雄大な交流論へと展開します。東西文明の交流論とは、東西文明の単なる比較ではなく、それらが交流し、相互に変容をくりかえしながら、地球大の1つの共通の世界を形成していることの確認です。『米欧回覧実記』には、幕末の海外派遣使節にありがちな、かたくなな自負心とその裏返しでもある劣等感が全く認められません。それは、久米が西欧文明を相対化できるより大きな視野をもつと同時に、文明の普遍性を信じていたからだと思います。久米はすでにイギリス編の第23巻「新城府^{ニューカッスル}ノ記上」の初めの方で、開化の普遍性を論ずる文章を記し、それを次のような結論で終えています。

西洋、東洋の開化ハ、乾坤ヲ別ニセルニ非ス、厚生利用ノ道ハ、豈ニ東西異理ナランヤ、（Ⅱ-255）

（2）民族の発見

『米欧回覧実記』は比較文化論のお手本のような書物です。『実記』は使節団の旅程にしたがって世界各地の多様性を描きだしてゆく。世界の多様性として私たち読者の目に映るのは、自然や都市の風景であり、農業・工業・商業といった生産と交通の形態であり、共和政や民主政やあるいは専制といった政治形態の違いであり、各地で出会う人々の人種や風俗の違い、等々でした。そうした様々な多様性のなかには、一目瞭然のものもあれば、ある種概念を通してでなければ理解できないものもある。共和政や民主政はそうしたものの1例で、その制度を理解するにはその理念が理解されねばならない。ある種概念をもっていなければ現実が見えてこない、共和政や民主政はそうした性質のものですが、『実記』の筆者にとって共和政や民主政以上に理解がむずかしかったのが「民族」ではなかったかと思えます。人種や民族が近代国家を形成する基本的な概念であり、しかもそれがヨーロッパの多様性の根幹をなしていることを久米が正確に理解するのは、ヨーロッパに入ってであり、ヨーロッパにおける旅程の終りの方になってからです。

ここで『実記』を少し離れて、民族という語の歴史について簡単にふれておきます。日本の近代は、近代にかかわるヨーロッパの基本的な語彙^{レクセカ}を漢語を使って翻訳するところから始まりました。文明や文化はその最も良い例です。文明は *civilisation-civilization* の翻訳語、また文化は *culture-Kultur* の翻訳語ですが、文明・文化それ自体は中国の古典にあり、日本の年号にもなった言葉です。ところが民族はこれと事情が少し異なっている。民族は *nation* または *Volk* の訳語とされていますが、中国の古典に民族はなく、日本で民と族を合わせて民族という用語が作られ、それが中国をはじめとする漢字圏に逆輸入された。しかも近代にかかわる用語は、『実記』を見ても分かるように、ほとんど大部分が幕末か明治の初期には出来ているのに、民族が用語として定着するのは、明治の後半から大正期にかけてです。これは日本の国民国家形成を考える上でかなり重要な問題でしょう。

したがって民族という用語が何年にどのようにして作られたかは興味ある問題ですが、まだそれは解明されておられません。私自身気をつけて文献に当たっているのですが、よくわからない。少なくとも私の知る限り、民族という語の初出は、これまでのところ『米欧回覧実記』である。おそらく研究が進めば初出はもっと早くなるかもしれません。しかも『実記』における例は、あま

り意識して使われているとは思えないし、現在なら民族と書くべきところに多くの場合、民種や民俗や族種や種族などが使われている。前もって結論を言ってしまうと、『米欧回覧実記』のなかには、まだ民族という語が使われておらず、その概念も明確でない時代の、民族という概念の形成の試みがさまざまな用語を使いながら行われている。つまり使節団の旅程のなかで、とりわけヨーロッパにおいて民族の発見があったのではないかと、というのが私の仮説です。（そしてさらに言えば、民種や民俗や族種、等々が民族に統一されてゆくところに日本近代の悲劇があったのではないかと。）

では「民族」は『実記』のどのような文脈のなかで現われているか。次の2例を見て下さい。最初は第52巻「^{オランダ}荷蘭^{ウイーン}佗国総説」、次は第81巻「^{ハンガリー}維納府ノ記、^{ハンガリー}附匈奴^{ハンガリー}奴国ノ略記」からの引用です。

○地球ノ上ニ、種々ノ国ヲ形成シ、種々ノ民族住居シ、各風俗生理ヲ異ニスルコト、意態万状ニテ、百花ノ爛漫タル観ヲナス、^{オランダ}歐洲^{ウイーン}各国ノ如キハ、元一様ノ政化ニ似タレトモ、其国ノ異ナルハ、即チ生理ノ異ナル所ニテ、已ニ白耳義人ハ、我日本ノ筑紫一島ニ比スヘキ、平野ノ面ニ^{ハンガリー}滓^{ハンガリー}励自主スルヲ見テ、又^{オランダ}荷蘭ニ至レハ、九州ノ筑肥四州ニ比スヘキ人口ニテ、^{オランダ}塗泥ノ中ニ、^{オランダ}富庶ヲ謀ル景況ヲ見ル、皆我ノ耳目心思ニ、多少ノ感ヲ与フルナリ、^{オランダ}嗚呼、天利ニ^{オランダ}富ルモノハ、^{オランダ}人力ニ^{オランダ}惰^{オランダ}リ、^{オランダ}天利ニ^{オランダ}俊ナルモノハ、^{オランダ}人力ヲ^{オランダ}勉ム、是天ノ自然ニ平均ヲ持スル所歟、(…)

(Ⅲ-221)

支那ノ古代ニ当リ、其人種ニ適シタル、道德政治ヲ設ケ、其規模ヲ以テ、四表ニ光被セント図リシ、^{オランダ}黄帝^{オランダ}堯舜ノ政略モ、^{オランダ}揚子江南ヲ限リ、^{オランダ}閩越ノ土苗サヘモ、^{オランダ}貨財ヲ貪リ、^{オランダ}嗜慾ニ^{オランダ}熾ナリトテ、^{オランダ}饕餮^{オランダ}人種ノ名ヲアタヘタレハ、^{オランダ}朔北ノ游牧諸族ニ至リテハ、^{オランダ}竟ニ^{オランダ}馴服スヘカラス、^{オランダ}夏ニ^{オランダ}獯鬻アリ、^{オランダ}商ニ^{オランダ}獯豸アリ、^{オランダ}周二^{オランダ}狄アリ、^{オランダ}秦ニ^{オランダ}胡アリ、^{オランダ}漢以來ハ^{オランダ}匈奴ヨリ擾乱セラレ、^{オランダ}万里長城ニテ、^{オランダ}永ク政化ヲ限界シタルハ、^{オランダ}各種ノ^{オランダ}民族ヘ一^{オランダ}種ノ^{オランダ}政治ヲ被ラシムベカラサルコトモ亦明カナリ、^{オランダ}朔北此等ノ諸族、^{オランダ}其興廢沿革ハ、^{オランダ}今其詳ヲ知ルニ由ナケレトモ、^{オランダ}畢^{オランダ}竟^{オランダ}韃靼^{オランダ}里奄、^{オランダ}蒙古^{オランダ}里奄^{オランダ}兩種ノ民ナリシコトハ明カナリ、^{オランダ}古來ヨリ此諸族ハ、^{オランダ}亜細亞ノ中部ニ繁息シ、^{オランダ}東ハ^{オランダ}黑竜江ノ兩岸ヨリ、^{オランダ}西ハ^{オランダ}高加索山ノ南マテ、^{オランダ}曠野ニ游牧シ、^{オランダ}其盛ナルニ当リ、^{オランダ}歐洲ノ東南ニ入り、^{オランダ}亞弗利加洲ノ北岸ヲ席卷シ、^{オランダ}西北ノ角ヨリ、^{オランダ}西班牙ニ打入り、^{オランダ}而テ東南ハ、^{オランダ}支那モ其^{オランダ}并呑スル所トナリ、^{オランダ}五胡、^{オランダ}遼、^{オランダ}金、^{オランダ}元、^{オランダ}及ヒ今ノ清トナリシハ、^{オランダ}皆蒙古、^{オランダ}韃靼ノ^{オランダ}兩族ニ^{オランダ}淪胥シタルナリ、^{オランダ}支那人モ^{オランダ}蒙古^{オランダ}里奄種ニイレ論スレトモ是ハ^{オランダ}清淨黄色人種トテ別一^{オランダ}種ニオク、^{オランダ}今ニ至ルマテ此^{オランダ}民種ノ繁息スル地域ハ、^{オランダ}甚タ^{オランダ}広シ、

(Ⅳ-404~405)

第2の引用は予定されていたブタベスト訪問が中止になった日に記された感想ですが、久米の想像力は多くに場合、このように日本や中国（それもしばしば古代の）にかんする連想に導かれて、東西比較論の形をとる。オーストリア=ハンガリー帝国という多民族国家の存在は、久米によほど強い印象を与えたようで、右の引用の数ページ前に次のような記述があります。

○此国ハ、^{オランダ}歐洲ニテ、^{オランダ}多種^{オランダ}成^{オランダ}国ト称スル国ニテ、^{オランダ}国民ニ^{オランダ}族類ノ繁キコト、^{オランダ}実ニ^{オランダ}混雜ヲ極メタリ、^{オランダ}普国、^{オランダ}露国ノ如キハ、^{オランダ}一^{オランダ}種ノ民、^{オランダ}他種ヨリ甚タ多キヲ以テ、^{オランダ}種族^{オランダ}權利ノ^{オランダ}平衡ヲ得タレトモ、^{オランダ}此国ハ^{オランダ}同種人ノミ居住シタル州ハ一モナシ、^{オランダ}故ニ各^{オランダ}聯邦中ニ、^{オランダ}政治ヲナスコト甚タ^{オランダ}困難ナリ、^{オランダ}且久シク^{オランダ}封建ノ国ニテ、^{オランダ}責^{オランダ}族甚タ多ク、^{オランダ}人^{オランダ}ミナ^{オランダ}門地ニ^{オランダ}矜^{オランダ}リ、^{オランダ}爵位ヲ重ンシ、^{オランダ}上等ノ民ハ^{オランダ}豪華ヲ競ヒ、^{オランダ}下等ノ民ハ、^{オランダ}其^{オランダ}压制ニ^{オランダ}服シ、^{オランダ}歐洲ニテ^{オランダ}貴^{オランダ}榮ナル^{オランダ}國体ナリト^{オランダ}誇リテ、^{オランダ}頗ル^{オランダ}夜郎自大ノ心アリ、^{オランダ}外交^{オランダ}海商ノ業ニ於テ、^{オランダ}殊ニ^{オランダ}人物少キヲ以テ、^{オランダ}世ヲ逐テ^{オランダ}衰弱ノ勢ヲ来セリ、^{オランダ}國中ノ^{オランダ}貴族ハ、^{オランダ}男子ノミヲ数ヘテ、^{オランダ}二十五万ノ多キニ及フ、^{オランダ}匈加^{オランダ}利ニ^{オランダ}オルモノ十六万人、^{オランダ}「カリチェン」ニ^{オランダ}オル^{オランダ}波蘭ノ^{オランダ}貴族ハ、^{オランダ}二万四千人、^{オランダ}波希^{オランダ}米ニ^{オランダ}オルモノ二千四百七十人アリ、

(Ⅳ-372)

この後、久米はさらに「国民ノ族種ヲ挙クレハ、左ノ如シ」としてハンガリーの民族構成をくわしく述べていますが、ここに至って久米はようやくヨーロッパの民族問題を理解したのだと思います。もっともこれより先にコペンハーゲンで「民種学の博物館」を見たことが久米の民族問題の序章をなしているのかもしれませんが。ウィーンの万博で世界の諸文明の交流のイメージを得た久米は、コペンハーゲンの民族博物館で、諸民族からなる世界のイメージを得たのではないのでしょうか。次の引用からもお分かりいただけるように、この博物館を見た久米の感激はなかなかのものでした。

一時半ヨリ歩シテ、博物館ニ至ル、館中ニ集蓄シタル物ハ、欧羅巴ノ北洋中ナル、^{アイスランド}水洲、^{グリーンランド}緑洲、又東西印度、南東洋ノ諸島等異俗ノ国ヨリ、諸物ヲ集メテ排陳シタルモアリ、是ヲ民種学ノ博物館ト名ツク、伯林府ノ博物館中ニ、此一区ヲ設ケタレトモ、特設ノ館アルハ、只此府アルノミ、故ニ欧洲ニモ名高キ館ナリト云、(…)○是ヨリ廊ヲ接シテ南亞米利加ノ諸民俗ヲ攤陳シテ、南洋群島ノ民ニ及フ、上層ニハ、日本、暹羅、支那、波斯、土耳其ノ器物、衣服製作ノ品ヲ飾ルコト、蘭、普ト同趣ニテ其観ヲ異ニス、日本ノ物件モ頗ル備リ、大ナルハ駕籠ニ至ルマテ陳列セリ、一人アリ、案内ヲナシテ、諸物ヲ指シ、日本ニテ何用タルヤト、^{ねんご}懇ニ尋問セリ、日本物品ハ、^{けだ}蓋シ此人ノ集蓄セル所ナリ、^{そもそも}抑 各国種種ノ民、域ヲ分チ国ヲナス、^{なま}猶草木ノ区ニシテ別レタルカ如ク、意態万状ニテ、開化ノ度モ、各相同シカラス、嗜好風俗互ニ異ナレハ、自然ニ有無貿遷シ、共ニ文明ニ^{じようしん}丞進スル機ヲ伏スルモノニシテ、文明精華ト称スル欧洲ニモ、習慣ニ溺レテ天真ヲ発スル能ハサルモノアリ、古拙簡樸ノ域中ニモ、亦殊勝ノ韻致ヲ存スルモノアリ、^{がく}学芸ノ要ハ、^{てん}天良ヲ発シ、^{ちやう}衆智ヲ蒐集スルニアリ、^{よう}要求スル成果ハ、^{こう}工技貿易ヲ広メテ、^ふ富庶ヲ遂クルニアリ、日本ヨリ欧洲ニ至レハ、物物ミナ精華ニシテ、我古拙ヲ愧ルヲ免カレサレトモ、欧洲人ハ又其^{よび}浮靡ヲ厭ヒ、反テ真韻ヲ東洋物品ヨリ發覚セラル、コト多シトナリ、民種学ノ博物館ヲ一見スレハ、此等ノ開明ニ、大ナル有益ヲ受ルモノナリト云、

(V-147~148)

旅程の後半に次第に明確な形をなしてくる久米のこのような民族認識をたどってゆけば、「欧羅巴洲総論」の冒頭が、なぜ「政俗」であるかはおのずと理解されるでしょう。久米はこの巻で「人種ノ論」や「民種ノ権」について言及し、さらに「婚姻」「言語」「信教」について論じられているが、これらはまさに民族を構成する要因であって、民族という言葉を用いずに民族の定義が試みられていると考えられるからです。

(3) 文明の再定義としての貿易

ヨーロッパ各国の旅程の最後に付された5巻にわたる「総論」を見れば、ヨーロッパを多様性の統合された1つの世界として記述しようとする著者の意図は明らかです。ここでもうひとつ強調しておきたいのは、そこではヨーロッパを描きながら同時に地球大の世界のイメージが次第に膨らみ重ね合わされていく、ということです。それは決してヨーロッパの拡大などではなく、ヨーロッパもアメリカもアジアや日本も、交流する世界の不可欠の一環として存在するということだと思います。そしてそのような交流する世界を1語で要約しているのが「貿易」という言葉です。そのことはこれまで引いたいくつかの文章ですすでにお気付のことと思いますが、もう1つだけ引用しておきましょう。

○欧洲各国、ミナ内ニ工芸ヲ競ヒ、外ニ貿易ヲ広クシ、地ニハ車、河ニハ舟、以テ船舶ヲ洋海ニ差派シ、

西米、東細ヲ回り、左右ニ視テ利ヲ謀ル、我日本ノ遼遠ナルモ、其産物ハ、数月ヲ出スシテ歐洲ノ市場ニ上ルベシ、其要津ヲ問ヘハ、曰ク倫敦、曰ク馬耳塞（仏）、曰ク奄特坦（蘭）、曰ク旱堡（日）、其他ハ寥寥トシテ聞コト希ナリ、今各国ノ實際ヲ經過シテ、其貨物ノ何処ニ著落スルヤヲ訪ヘハ、諸港津ハ一時ノ駅ステーションニスキスシテ、尽ク各国陸路貿易ノ要都ヘ分派シ、山陬僻隅ニモ、東西洋ノ物産ヲ仰キテ、盛ンニ生意ヲ起セルハ、比比ミナ然リ、故ニ世界産物ノ流通スル状ハ、海路ヲ経テ、要港ニ上リ、逆流シテ、陸地各処ノ工場ニ上リ、其貨物ハ、再ヒ陸地ノ要都ヨリ、海港ニ注輸ス、百川ノ流入スルカ如ク、動脈ノ注射スルカ如シ、而テ海港ノ百貨ハ、倒流ヲ生シテ、各地ニ向フハ、潮ノ進ムカ如ク、静脈ノ帰射スルカ如シ、今ヨリ生意ヲス、メ、国益ヲ興スニハ、世界ノ地理形勢ヲ深く観察セサルヘカラス、（IV-169）

久米のイメージは常に世界へひろがってゆきます。「動脈」「静脈」という言葉が出てきますが、久米にとって動静脈は世界の交通と貿易を表わす重要なメタファーで、他にも出てきます（V-172）。またここには「国益」という言葉も出てきますが、それは武力による侵略や略奪などではなく、平和な交易によるものです。久米のこの世界のイメージは、ヨーロッパを離れてインド洋から南シナ海を経て日本に至る帰航日程のなかで、いっそう明確な像を結ぶことになりました。東南アジアは古代から人種の交流と交易の盛んな地域であり、久米はそうした歴史を想起しながら、世界のイメージを描いてゆく。第5編の目次に「欧羅巴大洲ノ部・下 附リ帰航日程」とあるのを見て、「帰航日程」を文字通り無用の附りと考えるのは大きな誤ちです。米欧12カ国の訪問を目的とした岩倉使節団の報告書であれば本来必要とはしない「帰航日程」を7巻も使って書いてしまった久米の真意を考えるべきだと思います。世界周航を完結させるこの「帰航日程」においてこそ、2年近くにわたった視察の結論が記されているのです。「帰航日程」には久米の世界像と秘かな植民地批判が記されており、ここで述べたいことは多いのですが、時間の制約があるので、1箇所だけを引用するにとどめたいと思います。

支那ノ古代、羅馬ニ交通セルコト、已ニ羅馬ノ記ニ載ス、廣東ハ、其頃ヨリ南洋西洋ヘ交通ノ口トセシコト、猶我筑紫ノ韓唐ヘ交通セルニ同シ、古ヘ南海ノ明珠、或ハ日南珠ノ称アリ、是ハ広東海ニ真珠ヲ出セルニアラス、西洋南洋ヨリ琉璃、水晶、珊瑚、玫瑰ノ類ヲ持来リ、此地ニテ交易セルヲ、中土ニ分播セルナリ、其後中世ニ至リ、広東ノ交易モ、漸ニ衰ヘタリ、杜詩ニ所謂越裳翡翠無消息、南海明珠久寂寥トイヘルカ如シ、如此キコト殆ト千年ノ久キヲ経テ、葡萄牙人、再ヒ支那印度ノ船路ヲ通シ、澳門（即阿馮港）ヲ以テ埠頭トナシテヨリ、東西洋ノ貿易ハ、再ヒ興レリ、我邦ノ近古ニ、阿馮港ヲ葡萄牙、呂宋ヲ西班牙ト看做シ、南蛮ノ称ヲアタヘタリ、因テ西洋輸入品ヲ南蛮ノ物産ト思ヒ、南蛮鉄ナドト名ケシハ、実ハ西洋鉄ヲ南島属地ヨリ輸入シタルナリ、広東人ヨク海外ニ航ス、東ハ「カリホーニヤ」ヲ金山ト称シ、南ハ豪斯多刺亜ヲ新金山ト称シ、其他新嘉坡、馬尼刺、安南、ハタビヤ（爪哇）等ニ、支那人甚タ多シ、内地ニ於テモ、南洋ノ物件ヲ模作ス、広東府ニ於テ、種種ノ製作場甚タ多シト謂フ、古昔ハ西洋ノ物品ヲ目シ、日南珠、南蛮鉄ナドト謂シモ、今ハ又広東ノ物品ヲ執ヘ、西洋舶来品ト謂モノアリ、其支那製ナルヲ知ラス、凡貿易物産ニ注意薄ケレハ、百事此ニ類スルコト多シ、陶器ヲ瀬戸物ト呼ビ、肥前陶ヲ伊万里焼トイヒ、越後芋、八丈島、筑前蠟ノ類、内地ニテモ、確ト出処ヲ知ルモノナシ、況ヤ国民、親ラ足ヲ挙テ、国境ヲ離レ、外国ト交易スルヲ知ラス、外国ノ地理物産ヲ詳ニセサルモノハ、殆ト群盲ノ古器ヲ評スルニ似タリ、亦何ソ貿易ノ利ヲ興スニ足ラン、今ヤ操舟航海ノ業、年ヲ逐テ開ケ、貿易ノ道ハ、世界必要ノ務メタリ、地理ヲ講シ、民俗ヲ察スル、最モ物産ニ注意シ、其原由ヲ釋ネ、進歩日新ヲ計ラサルヘカラサルナリ、（V-327～328）

上の文章は明治維新から6年後の1873年8月28日、香港に上陸したときに記された感想のようです。この文章は久米邦武が鎖国の時代に育った人物であることを改めて思いださせますが、しかしここで語られているのは、明治政府が実現してしまったのとはまた別の近代の可能性であり、帝国主義的でないグローバリゼーションの理想でした。「貿易」は、文明を求める1年10カ月の旅程の末に、久米が到達しえた文明の再定義であったと思います。だがこの文明の再定義はその後の明治政府の政策から見れば、1つの逸脱を含んでいたという印象を否めません。その逸脱の行方を夢想するのは読者の特権であり、私にとって『米欧回覧実記』の1番の魅力はそこにあります。御清聴ありがとうございました。

注

- 1) 「日本にとってヨーロッパとは何か」（『学鑑』2001年3月号）
- 2) 西川長夫・松宮秀治編『米欧回覧実記』を読む——1870年代の世界と日本』（法律文化社、1995年）、14、372ページより。

岩倉使節団視察日程

横浜	1871.12.23→サンフランシスコ	1872.1.15
アメリカ	1872.1.16→8.5まで	
	[サンフランシスコ 1.16→1.30] [ソルトレイクシティ 2.4→2.21]	
	[ワシントン ①2.29→6.8 ②6.22→7.9 ③7.12→7.26]	
イギリス	1872.8.17→12.15まで	
	[ロンドン ①8.17→9.28 ②11.9→12.15]	
	[イギリス北部諸都市 9.29→11.8]	
フランス	1872.12.16→1873.2.16まで	
	[パリ 12.16→2.16]	
ベルギー	1873.2.17→2.23	
	[ブリュッセル 2.16→2.23]	
オランダ	1873.2.24→3.6	
	[ハーグ 2.24→3.6]	
ドイツ	1873.3.7→3.28	
	(北ドイツ・プロセイン)	
	[ベルリン 3.9→3.27]	
ロシア	1873.3.30→4.14	
	[ペテルスブルグ 3.30→4.13]	
デンマーク	1873.4.18→4.22	
	[コペンハーゲン 4.18→4.22]	
スウェーデン	1873.4.24→4.29	
	[ストックホルム 4.24→4.28]	
ドイツ	1873.5.1→5.6	
	(南ドイツ連邦)	
	[ハンブルク 5.1→5.2] [フランクフルト 5.3→5.4]	
	[ミュンヘン 5.5→5.6]	
イタリア	1873.5.8→6.1	
	[ローマ ①5.11→5.18 ②5.23→5.25]	
	[ナポリ 5.20→5.22] [ヴェネツィア 5.27→6.1]	
オーストリア	1873.6.3→6.17	
	[ウィーン 6.3→6.17] [その間万国博覧会視察4日間]	
スイス	1873.6.19→7.14	
	[ベルン 6.24→6.28] [ジュネーブ 6.29→7.14]	
フランス	1873.7.15→7.17	
	[リヨン 7.15→7.17]	
	マルセイユ 1873.7.18日乗船	

〔注〕明治5年12月3日（明治6年1月1日）をもって日本は大陰暦から太陽暦に改暦。この日程表は太陽暦と西洋暦に改めてある。

なお、滞在地に関しては、滞在が数次に渡るものは①②③と番号を付した。

帰航日程表

1873年（明治6年）		
7月20日	マルセイユ発	郵船「アウア」号
22日	ナポリ着	同日発
26日	ボート・サイド着	スエズ運河を通過
27日	スエズ発	紅海を通過
8月1日	アデン着	船中に泊り翌2日発
9日	ゴール着	セイロン島に上陸、ホテル・オリエンタル泊。12日発
18日	シンガポール着	コレラ流行のため上陸しない。19日発着
22日	サイゴン着	上陸するが船中に泊る。翌23日発
27日	香港着	上陸、ホテル・デ・ホンコンに泊る。翌29日発
9月2日	上海着	上陸アステルハウスに泊る。4日夜ゴルテンエン号へ乗船5日発
6日	長崎着	神戸経由で横浜へ向かう。
13日	横浜着	

後記

本稿は、2001年11月22日から25日にかけて東京神田一ツ橋の学術総合センターで行われた「岩倉使節団派遣130年記念国際シンポジウム」における報告に手を加えたものである。本文でも述べているように私の報告は、立命館大学で行われた『米欧回覧実記』にかんする共同研究にもとづいている。奥村功氏はこの輪読会の熱心なメンバーの一人であっただけでなく、『「米欧回覧実記」を読む——1870年代の世界と日本——』における「フランス編」の執筆者であり、それは本稿作成にあたって最も重要参考文献であった。奥村功氏は私の学生時代からの友人であり、立命館におけるフランス語教育の私の先任者でもあった。長い年月にわたるさまざまな思い出と感謝をこめて、この拙文を奥村功氏に捧げたい。